

世界に平和を・戦争の基地はいらない

羽村平和委員会発・横田基地ミニ情報 2012.3.15 No. 130 連絡先 FAX 042-555-1911



オットーフェザー大佐（米軍横田基地第374空輸航空団司令官）と 日吉章夫一等空佐（府中基地司令兼防空指揮群司令）が覚書署名



2012年3月5日、米第374空輸航空団の司令官のオットーフェザー大佐と、航空自衛隊防空指揮群司令の日吉章夫一等空佐が、合意の覚書に署名したと、米軍横田基地のホームページに掲載（写真も）されていました。「航空自衛隊防空司令部は今年横田でテナント単位になることが予定されているため」だそうです。覚書の内容は不明です。開示すべきです。（日吉氏の名は訂正、役職など加筆しています）

横田基地に配備か？ オスプレイ普天間配備前に一時本州に駐機



3月9日、日本経済新聞の電子版は「米軍新型輸送機オスプレイ、横田基地軸に一時駐機 7月にも」と報道しています。

「日米両政府は沖縄県の米軍普天間基地に今秋から配備する米軍の垂直離着陸輸送機MV 22 オスプレイについて、早ければ7月にも米軍横田基地（東京都福生市など）を軸に一時配置する方向で調整していることが8日、分かった。」というのです。

3月7日には、「米国防総省は、海兵隊のCH46中型ヘリコプターの後継機として垂直離着陸輸送機MV22 オスプレイ（左写真）を普天間飛行場に配備する方針で、今年10月に12機を先行配備させ、最終的には24機配備する計画。同機は開発段階で墜落事故が相次ぎ、沖縄県では安全性や騒音などに対する懸念が強いので、7月にも12機を横田基地、岩国基地、三沢基地など本州に一時駐機させ、試験飛行などを実施して安全性をアピールする方向」と報道されていました。

人口密集地の横田基地で試験飛行、とんでもありません。オスプレイの配備は何処でも反対！

普天間基地滑走路 2010年に補修したのに 大規模補修か

玄葉光一郎外相は6日の記者会見で、沖縄の米海兵隊普天間基地の滑走路などの施設の補修を行う方向で検討していることを明らかにしました。これは、在日米軍再編見直しに関する日米協議で、在沖縄米海兵隊のグアム移転を普天間「移設」と切り離し先行的に進めることにしたので、辺野古への「移設」が行き詰まり、普天間基地を継続使用するという考えを示したものです。

普天間基地の滑走路の補修は2010年に3か月かけて行われたばかり。さらなる大規模な補修は同基地の固定化につながり、沖縄県民の基地の即時閉鎖・返還を求める願いにそむくものです。



横田基地の撤去を求める座り込みに ご参加を！

3月18日は座り込んで丸3年 4月15日は4年目のスタート

2009年4月にスタートした横田基地撤去の座り込み行動も、皆さんに支えられ、早いもので、3月の座り込みで丸3年になります。

横田基地では、1月早々から米陸軍100名によるパラシュート降下訓練等をするなど、「何をやってもいいのだ」の態度がありあり。

アメリカ従属の日本、首都の横田基地から変えていきましょう。ご参加、お待ちしております。

いそげ復興、なくそう原発、いのちとくらしを守る 3・11 西多摩集會に400人



西多摩集會は、羽村市のどんぐり山公園で集會。挨拶や現地の状況の訴え、それぞれの思いが語られました。その後、河辺コースと福生コースに分かれ、「いそげ復興！なくそう原発！」等シュプレヒコールしながらにぎやかな通りを元気に行進しました。

3・11震災復興・原発NO！ウォーク inあきる野行動に170人



西多摩のあきる野でも、秋留野広場でイベント、秋川駅周辺のパレードが行われました。イベントは各団体などが持ち寄って、うたごえ、大声コンテスト、年金と暮らしの相談、震災ボランティア支援写真展、原爆展、子ども工作、絵手紙作成など多彩に行われました。ウォークでは「震災復興、原発いらない」と唱和し、沿道の人々から激励の拍手を受けました。88歳の高齢者から赤ちゃんまで幅広い年齢層が参加。

「沖縄の美術シリーズ3 玉那覇正吉（たまなはせいきち）展」に寄せて その2

新都心おもろまちのホテルを予約し、2月、玉那覇正吉の作品に会いに、沖縄に飛んだ。

私は玉那覇正吉作品集で、彫刻や絵画はある程度知っていたが、やはり、実物を見たいという思いが強かった。彫刻の立体感、絵画の色彩や画面の大きさを実感できて本当に良かった。

玉那覇正吉の姉である母も、早すぎた弟の死を悲しんでいたが、天国で喜んでいるだろう。

3年前の3月、私は偶然、NHK教育テレビの日曜美術館「ニシムイ沖縄・知られざる美術村」の放映を知った。沖縄で開催されている展覧会の紹介だった。当時の叔父の写真や作品がテレビ画面に写り、



私は、叔父の作品を見たいとの衝動にかられた。

美術展開催中は都合がつかず、4月になって10年ぶりに沖縄に行った。県立美術館、平和祈念堂、那覇市役所のシーサー像、首里支所の竜レリーフなど、叔父の作品を追いかけた。また、思わぬところで玉那覇作品に出会えて、とても感動した。

そして、3年後、玉那覇の家族などをモデルにした彫刻、自画像や、たくさんの船の絵画など、一生かかっても見る事ができなかったであろう百数十点の作品に出会うことができた。玉那覇正吉展を開催していただいたこと、とても感謝している。

米軍占領下に制作された「鳥たち」という100号の油絵がある。玉那覇正吉は数年かけてこの作品を完成させたが、制作中に次のような文章を残している。

鳥たち、それは沖縄の人達なのだ。見えない枠にかわれ、時あれば、手元に引きよせられて、饗宴の卓上に飾られていく、丁度 七面鳥のように。

この鳥たちは、決しておのれの生を謳歌しているのでもない、楽しんでいるのでもない、足もとをじっと見ている鳥たちである。飛ぶ翼の退化をいまさらながら恨む鳥たちである。



鳥は沖縄の人達と言うけれど、私はなぜか、この絵が叔父の「自画像」のような気がしてならない。
(写真は玉那覇正吉作の那覇市役所の「シーサー」と、ひめゆりの塔の「百合のレリーフ」)